

### 【横山先生】

どうもありがとうございました。宇部市の取り組み、それから実態調査の結果なども、今、民谷さんの方からご紹介いただきました。

お二人のお話うかがいまして、専門職、また一般の方も含めて、少しずつこのヤングケアラーという言葉が知られ、そして徐々にですが理解が深まってきたのかなと感じます。

ただ、ヤングケアラーという言葉は知っているけれども、具体的に当事者の人達にどうやって気づくのか、もっと支援率上げるための踏み込んだ気づきは、なかなか難しいのではないかなとも思います。一般論として理解をするということと、それがどう具体的な支援に結びついていくかということとを並行して考えていかなければならないとも思います。

先ほど事例発表をしていただきましたお二人にも、パネリストとしてご登壇いただいております。先ほど言い足りなかったことがあれば、補足でも結構ですし、知ることから支援に繋いでいくということについて、お話をいただけたらと思います。中村さんからお願いできますか。

### 【中村さま】

はい、子どもと親のサポートセンターの中村です。今日、ここに参加するまでは、ヤングケアラーという言葉はあるものの、別にそういった言葉はなくても、私たちはそういったご家庭をずっと支援をしてきたので、今やっていることを継続することが大切だと、ずっと思っていました。今もその気持ちは変わらないのですが、他の発表者の皆さんから、職能団体として取り組むとか、行政としてアンケートをされているとか、支援対象者が孤独にならないようにしているといったお話をお聞きして、私たちも、もうちょっと何かしなければいけないのではないかと感じています。

ヤングケアラーの支援において、見つける、繋ぐ、支えるという言葉があると思いますが、特にスクールソーシャルワーカーは、見つけるということがすごく苦手だったりします。なぜかという、山口県では、スクールソーシャルワーカーは学校が教育委員会に依頼し、そこから派遣される仕組みになっています。ですので、私たちは、学校の先生方に見つけるということをお願いしなければなりませんし、これをどのように仕組み化していくかについて考えていかなければならないと思いました。

また、スクールソーシャルワーカー自体もあまり周知されていないところもあるので、私もこういった所がすごく苦手なんですけど、頑張っって今後も参加したいと思いました。はい、以上です。

### 【横山先生】

ありがとうございます。確かに県内では、スクールソーシャルワーカーは派遣という仕組みで活動されていて、そのため、スクールソーシャルワーカーは見つけるという部分に十分に関与できていないというお話でした。これは私も個人的にとっても課題と感じています。いつも学校にいて、見つける、そして繋ぐということができていくのではないかと感じます。ありがとうございます。

では、先ほど事例発表いただきました加藤さん。ソーシャルワーカーとはまた違った側面で、何かお話いただければと思うんですが、いかがでございましょう。

### 【加藤さま】

見つけるって、すごく難しいと思います。子どもたちが自分で、「私ってそうかもしれない」と思えるような何かがあれば良いと思うので、そのためにもこういう言葉をもっともっと広めていけたらいいと思います。

また、子どもが、「自分もそうかもしれない、相談してみよう」と思った時に相談できるツールや場所があればと思います。今はSNSが多いのかもしれないんですけど、ちょっとツイートしてみようかなと思うような場所があれば、自ら発信することが少しできるのかなと思います。

ただ、この自ら発信されたことに対して、私たち大人がいかに個々に対応していくかということはとても大切で、繋ぐというのも私たちが遠慮していたらダメだなと。繋ぐ側の大人は、「私は、こんなことはできないけど、あなたは、こんなことしたいんだよね」と分かったら、できるかもしれないと思う人に遠慮なく連絡をする。連絡受けた人は「それ丸々にはできないけど、この部分ならできるよ」ということを見つけていく。そういったことで繋げていける、支えていけるのかなと思います。

【横山先生】

はい、ありがとうございました。見つける、あるいは気づいたというところが仮にクリアされたとしても、次にどこに繋いだらいいのかという、いわゆる受け皿というものの必要性。そして、その受け皿になるべき専門職なりの人たちが、きちんと理解し、その認識を持った上で支援を展開していくということ。それがその後の継続した適切な支援に繋がっていくような気がいたします。

それではですね、今日このパネルディスカッションにご登壇いただくパネリストの方はもうお一人いらっしゃいます。ヤングケアラーの元当事者の方で、今日はオンラインで繋いでいただけるということです。ご本人のご希望によりYさんというふうに呼ばせていただきます。

Yさん、今日は、オンラインでのご参加ということで、どうもありがとうございます。

【Yさん】

はい。よろしくお願いします。

【横山先生】

お願いします。

今日は冒頭の行政説明から、安部先生のお話、事例発表とずっと聞いていただいていたかなと思います。ぜひですね、今日のお話踏まえて、またヤングケアラーのご経験のある方ということでございますので、ご自身のヤングケアラーとしての経験を踏まえて、感じたことや考えたことなどをご自由に発言いただきたいのですけれども、お願いできますでしょうか。

## 【Yさん】

はい、承知いたしました。まず改めて、この度このような話す機会をいただいております。オンラインの参加で聞きづらい点もあるかと思うんですが、よろしく願いいたします。

では、早速今日のシンポジウムについて、私がお聞きして感じたことや、思ったことを共有させていただきます。まず行政説明についてはですね、行政として、これから本格的に県全体で支援がスタートしていくんだという印象をすごく受けました。3つの柱として検討会議、実態調査、シンポジウムを行うということでしたが、私が一点思ったのは、検討会議等についても今後、元当事者といった方も加わると、より会議の質も上がっていいのかなと思いました。

次に、基調講演の安部先生のお話については、現場で22年間勤務されていたということもあって、ヤングケアラーの方の視点も入ったお話でした。その中でも「ヤングケアラーのことを否定しない」だったり、「一緒に考える」といったところは、すごく共感を持てるところで、貴重なお話だったと思っています。

事例発表のスクールソーシャルワーカーの中村様の話については、支援を必要としている方と同じ目線に立って、日々支援されているんだという印象を受けました。中でも、無理やりどこかで繋がうとしないという視点も持たれていたところは、私も当事者だった時にもすごく感じていた点でもあったので、すごくいいなと思いました。

次に、特別生活指導員の加藤様のお話ですけど、今すごく困っているヤングケアラーの方と関わっておられ、「お手伝いをしている」という言葉があって、支援者としてできること・できないことをすごくはっきりして支援されているんだという印象も受けましたし、アウトリーチという言葉も出ていたので、そこはすごくいいなと思って話を聞いていました。

パネルディスカッションについては、専門職の方のアンケートも見られて、普段得ることができない情報などを知ることができたので、すごくいい機会だったと思っています。

次に、私もヤングケアラー元当事者として、こういう支援だったらいいのかなか、感じていることであったり、本日のパネルディスカッションのテーマである、「ヤングケアラーを見つける、つなぐ、支える」という3つの視点についてもお話していこうかなと思います。

## 【Yさん】

まず、一つ目の「見つける」についてですが、私が元当事者として思うのは、小学校高学年から中学生にかけて「見つける」取組を重点的にやるというのかなということです。というのも、正直に言って高校ではちょっと遅いというか、もう高校生になってしまうと、支援の手があったとしても、日々の生活に疲弊してしまっていて、その支援の手を掴むエネルギーなどありません。

ですので、小学5、6年か中学生にかけて、支援に繋げる取組を重点的にやると思います。高校で繋がっても、正直に言って、将来の選択肢だったり、その子が社会に出て活躍する人材になるといったところを目標にすると、もう遅いという印象を受けています。

したがって、小学校高学年から中学校にかけて、なんとか繋ぐといったことが大事かなと思っています。

2点目の「繋ぐ」なんですけれど、私が元当事者として感じているのは、もちろん他機関・他職種の方と繋がってサポートしていただけるのはありがたいのですが、子どもから見ると、いろんな大人と関わるのはすごくストレスで、不安になることもあるので、ワンストップ型で、スピードを早くして、繋いでサポートしてもらうのがいいのかなと思っています。そして、先ほどもお話があったとおり、無理に繋げないのがいいかなと思っています。

最後、三つ目の「支える」のところなんですけれど、他機関と連携して繋げるのは大事なポイントでもあるのですが、先ほどから申し上げており、私個人の見解としては、他機関の方と関わることは、当事者からすると負担になったり、気持ちの余裕もない中であつたりもしますので、関わってくれる支援者は最低限にしながら、必要な支援があるといいのかなと思っています。

あとは、支援の最終ゴールをはっきりさせる必要があると思っています。私も元当事者であった小中高には、なかなか支援がありませんでした。将来の選択肢はすごく狭まっていて、考えなければならぬときにはもうほとんど選択肢がない状況になっていたもので、やはり最初に繋がった時点から、その子が社会に出て活躍できるようにといった視点を持ちつつ、関わるといいのかなと思っています。

ヤングケアラーの子というのは、大人になって社会に出ると、アダルトチルドレンという言葉もあるとおり、おそらくそういった方向に進む子たちもいます。長期的な視点を持って、5年、10年かけてサポートする。支援者としてもっと関わることも大事ですし、継続して5年、10年とできることを軸に関わっていくことがいいのかなと思っています。私からのお話は以上となります。

### 【横山先生】

はい、どうもありがとうございました。当事者の方ならではの気づきというか、聞いていてとても学ぶことが色々ありました。ありがとうございます。

ちょっと私からも伺いたいんですけど。お話いただいた中で、「もう高校生の時点では、介入はちょっと遅い」というようなお話をいただきました。小学生、中学生の頃から早期介入する必要性をお話いただいたところですけど。しかし、その頃は年齢が低いだけに、なかなか外に向けての発信が難しい。言い替えると、外から気づきにくいということもあるかなと思います。ご自身の経験から、当事者としての思いで結構なんですけど、外の大人が気づくためには何が必要でしょうか。

### 【Yさん】

そうですね。もう言われていることだと思うんですが、細かい変化とか小さな変化を日々見逃さないということだとは思いますが。私自身も、例えば欠席がちだったりとか、学校の机が散らかっているとか、ロッカーが汚いとか、そういった時もありましたので。そういう小さな変化、サインを見逃さないようなシステムなどがあると、一人でも多くの子が支援に繋がれるのかなと思います。

【横山先生】

はい、ありがとうございます。もう一つ質問させていただきます。最後にお話いただいた「最終ゴールをはっきりさせる」ということについてです。支援する側は、見とおしを持って、それから長期的な視点を持って考えていかなければならないといったご発言をいただきましたけれども、特に行政のサービスになると、長く継続的に支援を続けていくことはやはり難しいと思うんですけれども。Yさんご自身は、今、ケアラーの方々の支援に携わっておられるのでしょうか。

【Yさん】

そうですね、今はちょっと、なかなかできていないんですけれど、そういった当事者をサポートする団体を設立して活動したという実績があります。

【横山先生】

今のお話によると、やはり、行政と民間の役割分担といったところも大事になってくるのかなと思います。息の長い支援を実現させていくために、「ぜひ、こうした方がいいんじゃないかな」と思うYさんのお考えがあれば教えていただきたいんですが、いかがでしょうか。

【Yさん】

そうですね。先ほどと同じ話にはなりますけれど、私が団体を設立して活動していた時も、行政の立場や当事者の立場、その他支援機関それぞれの立場があるので、そこを理解した上で、それぞれができること、できないことを日々ヒアリングしていきました。できること、できないことをはっきりさせて支援していくことが大事だと思います。あとは、支援者の方のケアも忘れずやっていくことがいいのかなと思っています。

【横山先生】

どうもありがとうございます。時間も限られますので、こちらの方でまたお話を展開させていただきますので、一旦ここで切り上げたいと思います。Yさんどうもありがとうございます。

【Yさん】

ありがとうございました。

### 【横山先生】

それでは、パネリストの方々に、それぞれの立場からお話を伺ってきたところでございますけれども、ここで西南学院大学の安部先生からコメントをいただきたいと思います。今のお話を踏まえて、先生からぜひお願いいたします。

### 【安部先生】

はい、ありがとうございました。皆さんのお話、本当に興味深く聞かせていただきました。

中村さんの言葉では、「繋げて終わりになりがち」というのが一番気になりました。

加藤さんの活動もすごくいいですけど、仰いませんでしたが、完全に重度のネグレクトだと思いました。ネグレクトという視点も必要ですね。

橘さんの話では、研修が大事と思いました。

僕は先ほど、社会的孤立の話をしました。子どもたち自身が、自分から見つかからないように、できるだけ目立たないようにしようとしてると。そういう中で見つけていくのは相当大変だろうと思います。最近、車いす体験といって、車いすを押す体験とか、ブラインドウォークで、視覚障害の方にこのようにサポートしたらいいですよといった、そういう研修多い気がするんですが、助けられた経験というのをさせたいなと思うんですよね。「助けられてよかった、相談してよかった」というふうに思わないと、自分から「助けて」と言わない気がするんですよね。

だから、加藤さんの話にあった、「お母さんがバンバン要求してくる」というのはいいことだと思いますよね。バンバン要求してくるから、そこで繋がれますから。どうしても「自分たちでやらなければ、家族でやらなければ」と思ってしまう。そして、支援者自身も自分からSOSを出せない、みたいな。なんだか、みんなSOSが出せないなと思っていて。だから、助けてもらえるのが権利とまで言うかどうかは別ですが、助けてもらうことがトラウマや傷つきにならなくて、「相談したら助けてもらって楽になった。良かった」という経験を、実はみんなしなければいけないのかなというふうに思いました。



## 【安部先生】

そして、繋ぐことについて、民谷さんは「市役所が、そういう役割かな」というふうに言われていましたけれども、この繋ぐ役というのは、みんなそうなんですよね。相談された人が次の人に繋ぐ。そして、それは繋ぎっぱなしではなくて、繋ぎ続けていくっていうことが大事です。中村さんの事例の中にエコマップがありましたけれども、エコマップに描かれていた機関は元々あった機関だけど、誰かが繋がらないとこの家族には繋がらなかった。そういう意味で、コーディネーターというのが必要なのかなと思います。そのコーディネーターは、役所だけではなくて、スクールソーシャルワーカーだったり、ケアマネさんだったり、それから加藤さんみたいな支援員さんだったり、いろんな方がなりうるということですし、それは気づいた人、見つけた人の義務ではないかなと。繋いで終わりじゃなくて、繋ぎ続けること。

先ほど最終ゴールはどこかという話がありましたけど、支えるだけではなく、支え続ける仕組みがいるのだらうと思います。そして、支え続けるためにどうすればいいかという、当事者参加なんですよね。子どもと親、そして支援者が一緒になって、上下の関係ではなくてフラットな関係をつくる。お手伝いという言葉がありましたけれども、一緒に「どうしようか」と考えていく。子どもが自分を大事にするために、今すぐ改善されなくても、5年先、10年先がもっと良くなっていくように、みんな考えていくということです。

福岡県では、子どもや保護者が参加するケース会議のことを「家族応援会議」と言います。家族を応援するためにみんなが集まって、どうしたらいいかを考えるといった位置づけのものです。本当に家族を支え続けるためには、やはり当事者が参加をして、みんなで話し合う必要があります。ヤングケアラーでも、子どもがやってきたことをねぎらい、だけでも自分を大事にするためにはどうすればいいかを一緒に考えていこうという、そういう会議ができていくといいなと思います。

ただ、家族応援会議は、障がい者や高齢者の分野は当然当事者が参加するのですが、子どもの分野はどうしても子どもや親抜きでやろうとしているところがあり、その点が問題かなというふうに思います。以上です。

### 【横山先生】

はい、ありがとうございました。やはり再三出てきていますけれども、息の長い支援を継続させることの必要性和、そのためには当事者が参加して、みんなと一緒に考えていこうという姿勢が大切だということをお話いただきました。

やはり、一人の人がずっと寄り添い続けていくということは、難しいだろうと思います。一人一人の事情に寄り添った丁寧な支援をするのであれば、特定の人だけが支援するより、できるだけすそ野を広げ、多くの人が、専門的な役割なり、話を聞くだけの役割なり、いろんな形で寄り添って支援をつなげていく。丁寧な支援をするためには、支援のすそ野を広げる、輪を広げるということが必要なのかなと、今お話を伺いながら思った次第です。安部先生ありがとうございました。

では、今、それぞれご登壇いただいた方にお話を伺ったところなのですが、フロアーの皆様の中で、ぜひパネリストの方に質問をしたいとか、あるいはご意見だけでも結構ですので、ご発言したい方がいらっしゃいましたら、ぜひ伺いたいと思いますが、いかがでございましょう。

はい。安部先生がぜひYさんに質問したいということですので、Yさんに繋いでいただきます。

### 【安部先生】

はい。Yさん自身がヤングケアラーとしてケアを担っていた時に相談できたかということ。それと、ケアラーの当時、どんなことがあったら相談しやすかったかということをお話いただけますか。

### 【Yさん】

ご質問ありがとうございます。

私の経験ですと、小学校時代から母が精神的に疾患を抱え、その後、父がギャンブルに依存したりといった状況でした。私も、小学校高学年から中学校にかけて、「なんかちょっと他の家庭と違うな」と少し自覚し始めましたが、ただその時はヤングケアラーという自覚もなく、それが当たり前だと思っていました。そこから、もう高校になると、苦しいけどこれが当たり前で、これでやっていくしかないといった感じになっていたので、支援者との関わりもありませんでした。ただ、当時は相談できる場所もわからず、また声を掛けてもらっても、「大丈夫」と自分も答えていました。ただ、声を掛けられれば掛けられるほど、なんだかどんどんそれに対する苛立ちも起きたりして。そのような状況でしたが、当時、誰か1人でも落ち着いて話聞いてくれる人が、学校にいたらよかったなというのがあります。それと、祖母を私が介護していたことからケアマネジャーさんと関わることもあったので、そこで繋がれる機会があったのかなと思います。

当時はまだまだヤングケアラーというものが浸透していなかったもので、私が何か支援に繋がったことはなかったんですが、繋がる機会があったのかなと思っています。ですが、どうやったら繋がれるのかということは、ちょっと難しいですね。以上です。

### 【安部先生】

今のお話の中で、声を掛けられれば掛けられるほど、頑なに「大丈夫です」と答えていた言われましたけど、もし、今、Yさんみたいな子がいたら、Yさんだったらどんなふうに声を掛けられますか。

### 【Yさん】

そうですね。声を掛けるというか、一緒の目線に立って、一緒にいろんなことを体験していきながらコミュニケーションをとって、そこから何か困ったことあったら相談に乗ったり、関わるという感じかなと思います。

### 【安部先生】

ということは、「なんか家で大変なことがありそうだな」と思った場合、そのことをダイレクトに話をするよりも、まずその子とはいろんな話ができる関係になる方がいいということですか。

### 【Yさん】

私はそう思います。そもそもそういう子たちは、大人に対しての信頼もないので。私も、当時は大人のことを信頼できていなかったなと思います。まずは一緒にいろんなことを遊びながら関係を築いていく中で、親密になっていくといいかなと思います。

【横山先生】

はい、ありがとうございました。ほかのパネラーの方からも、Ｙさんに聞いてみたいことがありましたら、ぜひいかがでございましょう。

【中村さま】

はい。スクールソーシャルワーカーの中村です。Ｙさん、非常に答えづらい質問かもしれませんが、ぜひお聞きしたいことがあります。学校に行っている間にですね、ヤングケアラーという立場で嫌だった体験、また、大人にされて良かったことではなく、ちょっと気を配ってほしかったということがあれば、可能な範囲で教えていただければと思います。

【Ｙさん】

そうですね。ケアラーとして嫌だったことは、先ほど話にも出ていましたけど、どこかすごく気を使っているとか、なにか他の子と違うような目で見られて関わられると、すごく傷ついたということがあります。家庭が違うだけでここまで見方が違うんだと思うと、すごく辛いなと思いました。あとは、声掛けの時も、「なんか元気ないね」とか、「どうしたの」といったように聞かれると、こっちはこれだけの環境でなんとか元気に頑張っているのに、「元気ないけど、どうしたの」と聞かれると、なんだかもっと頑張らなきゃいけないみたいな感じになって、すごく苛立ちを覚えた記憶もあります。そういった声かけの言葉についても、最初の関わりでは気をつけるといいのかなと思います。

【中村さま】

大変答えづらいことなのに、ありがとうございます。  
私も以前、関わらせていただいたお子さんで、初めて面談をして家庭のことを話してくださったんですけど、私の面談もきちんとできていなかったところもあって、その後すごくわーっとなってしまったことがありました。そんなことを思い出しながらお話を聞いていました。ありがとうございました。

【Ｙさん】

ありがとうございました。

【横山先生】

Yさんどうもありがとうございました。  
残りの時間が少なくなってきたので、最後にYさん、今日の感想や、今の思いなどありましたら、一言いただければと思います。

【Yさん】

はい、ありがとうございます。そうですね。本当に、ここ数年でヤングケアラーのことも浸透してきて、実は私もここ数年の報道で取り上げられて初めて「ヤングケアラーだったのかな」という自覚を持ち、ヤングケアラー当事者として何かできることはないかなといった思いで、今回も引き受けさせていただきました。確かにデリケートなことですが、当事者と一緒にやっていくしかないのかなと思っています。  
今回はオンラインでの参加でしたけれど、少しでも今後のヤングケアラー支援のためになったら嬉しいです。また機会があれば、ぜひ協力させていただきたいと思っています。

【横山先生】

どうもありがとうございました。もしかしたら、ちょっと話しにくいこともあったかもしれませんが、しっかりと答えていただきまして、貴重なお話をどうもありがとうございました。

【Yさん】

ありがとうございました。

【横山先生】

それでは、事前の打ち合わせでは、パネリストの方々には2周目はなしとお話ししてありましたが、あえて最後に一言ずつ、今日のご感想をお願いします。

【民谷さま】

はい。当事者の方々の声がしっかりと聞けましたので、すぐにはちょっと考えがまとまりませんが、行政としてどのように対応すべきか、自分の職場だけではなく、関係課の職員と重層的にしっかりと考えていきたいと思いました。

### 【加藤さま】

私の友人にもヤングケアラーだった方がいらっしゃいます。学校から帰ったらアルコール依存症のお母さんの着替えから始めていたと言うのですが、昔と今とでずっと続いていることと、今から変えていかなければいけないこととがあると思いました。ありがとうございました。

### 【中村さま】

はい、私はですね、今日参加させていただいて、私に足りなかった視点、社会に出てからのサポートがよくできていないというふうに感じました。私は県立高校を担当することが多いので、高校を卒業した後、社会に出る子どもが多いのですが、一応「終結したご家庭には基本的に関わらない」というルールがあります。だけど、以前ですね、高校中退されたお子さんが、1年後ぐらいに連絡を取ってきてくださって、「中村さん、通信高校ってどうやって行くん？」って相談してくださってですね。私はその時普通に回答したんですが、これをちゃんと仕組みにしないといけないなと、今日感じました。はい、ありがとうございました。

### 【橘さま】

はい、ケアマネジャーとしてヤングケアラーに関わる第一歩だったかなと、今日は改めて思いました。さっきのYさんの家庭にもケアマネジャーが入っているにもかかわらず、なかなか家庭の状況が見えなかった。家族図だけではなく、中村さんが使われていたエコマップなども使い、家族関係がどれだけ複雑なのかを把握することが大事だと分かりました。本当に第一歩ですので、まずケアマネジャーに今日の報告をして、必要な研修があれば開催していき、全体に伝えるようにしていきたいと思っております。ありがとうございました。

### 【安部先生】

はい、ありがとうございました。山口県に来させていただいて、いろんな取り組みが今から始まろうとしているんだと分かりました。もう既にアンケートを実施していたりとか、今日シンポジウムされていたりとか、既に一歩踏み出している状況であるということを感じました。これから先2年目、3年目、どんな取り組みをするんだろうと、とても関心を持っています。ありがとうございました。

### 【横山先生】

はい、どうもありがとうございました。

今日は、行政説明から講演、事例発表、パネルディスカッションと続けてまいりましたが、今、安部先生もおっしゃいましたように、県での取り組みは、これから本格的になっていくのかなと思います。

まだまだ実態が掴めてないところもありますし、今日ご登壇いただいた方々以外の専門職の方々、関係者の方々など、まだまだたくさんいらっしゃいますので、そういった方々へもしっかりとヤングケアラー問題の認識、理解を深めていく必要があると思います。

私も大学で児童福祉をやっている者として、このヤングケアラーの問題は子どもの権利侵害なんだということを改めて認識させられました。そして、子どもと共に考えなければいけない問題なんだということを勉強させていただきました。

今日のような活動を積み重ね、支援を必要としている子どもたちが、すぐに支援につながるように。それが私たちの押し付けではなく、彼らを主体とした適切な支援として、今後展開されていくことを願いながら、このパネルディスカッション、そして今日の行事全体を閉めさせていただきたいと思います。今日ご登壇いただきました5名の方、そしてYさんに、最後に皆様から拍手をお願いいたします。

それでは、以上を持ちまして、ディスカッションを終了させていただきます。どうもありがとうございました。

### 【司会】

ありがとうございました。改めまして、ファシリテーター、パネリストの皆様、大変ありがとうございました。今一度、大きな拍手をお願いいたします。

以上を持ちまして、山口県ヤングケアラーへの理解を深めるシンポジウムを閉会させていただきます。

山口県は今後もヤングケアラーを早期に把握し、適切な支援につなげていくために取り組んでまいる所存です。

県民の皆様のご理解とご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

